様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ２６ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2016～2017
課題番号：１６Ｈ０６５８２

研究課題名（和文）ロシア音楽の「自己覚醒」に対しマスメディアが果たした役割の研究

研究課題名（英文）The Role of Media on Self-awareness of Russian Music

研究代表者
神竹　喜重子（Kamitake, Kieko）

北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・非常勤研究員

研究者番号：７０７８６０８７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、19世紀末以降におけるロシア音楽の「自己覚醒」に対し、マスメディアが果たした役割を検証することにある。このような目的のもと、当時のロシア・ソ連の音楽雑誌において報告されたロシアの歌劇文化の実態内容と、ロシア音楽自体の本質に関する音楽美学上の言説をとりあげた。
　その結果、19世紀末以降の古儀式派による芸術メセナを背景として、古儀式派による私立歌劇場と、ロシア各地方都市及びロシア周辺地域の歌劇場との間に、人とオペラ作品の移動を通しての緊密なネットワークが構築されており、ロシア音楽界のマスメディアが、これをロシア音楽におけるナショナリズムと位置付けていたことが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This study focused on the roles of the mass media in the process of self-awareness of Russian music from the end of the 19th century, analyzing the then reports on the actual situation of Russian opera culture and the aesthetic discourse on the substance of Russian music, which were placed in different Russian journals and newspaper.
 It turned out that there existed close connections among old believers' private opera theaters, opera theaters of the provinces and those of surrounding areas of Russia in the context of the patronage of arts by old believers from the end of the 19th century. The mass media of Russian music circle regarded this phenomenon as nationalism of Russian music.

研究分野：人文学

キーワード：音楽史　表象文化論　ロシア　オペラ　古儀式派

１．研究開始当初の背景

19 世紀末以降、ロシアは本格的に「銀の時代」を迎え、象徴主義をはじめとする様々なモダニズム運動の隆盛を見ていくこととなる。このなかで、ロシア音楽界では、ロシア音楽の「ロシア性」とは何か、という謂わば自己意識に端を発した議論が展開されていた。具体的には、「西欧から自立したロシア」の表象がロシア音楽に求められていったのである。その中で重要な役割を担っていたのが、当時のロシアのマスメディアであった。

マスメディアは、音楽作品に対するあくまで二義的なものとして、音楽学の中では重要性を付与されてこなかったが、音楽作品とそれを受容する聴衆の媒介者として重要な社会的役割を果たしてきたうえ、音楽作品そのものや、音楽家の活動に対する影響も多大である。つまりマスメディアは、文化、芸術全体の意味を問う大きな問題と密接に結びついている。文化史的視点よりロシア音楽を論じるには、マスメディアに注目することが肝要であり、それによってロシア音楽がいかに当時の時代精神と関連づけられ、意味づけされているのかが明らかとなるのである。

２．研究の目的

ロシア音楽がモダニズム運動の隆盛の中、いかに自己の「ロシア性」を追求していったのかという問題においては、当時のロシアにおける歌劇場の活動の実態、及びそれに対するメディアの影響がとりわけ重要な分野となる。何故なら、第一に、歌劇場で上演されるオペラというものが言語を伴うものであり、故に地域性が強調されるからである。第二には、歌劇場研究が 1980 年代に本格化して以来、歌劇場に関する多様なデータベースや資料集が公開されているものの、ドイツやイタリアなどの西欧に比して東欧諸国やロシアはまだ不十分な段階にあるからである。特にロシアにおいては、ソ連時代のイデオロギー的制約により、19 世紀末より前衛的な活動を行っていた私立歌劇場に関する資料公開や研究が遅れている。

以上に鑑みて、本研究ではロシアにおけるマスメディアと私立歌劇場の相関関係に着目し、その中で、いかにして西欧から自立した「ロシア音楽」という概念が追求されていったのか、また私立歌劇場及びそれらの上演活動が、どのようにメディアのロシア音楽論の中に組み込まれていったのか、あるいは反対にメディアが私立歌劇場に及ぼした影響があるのか否かについて明らかにすることを目指した。具体的には、①ロシア国内外の各歌劇場における上演データ、②それらの相互比較に関する論考、③ロシア・オペラの展望に関する美学的議論という三つのテーマに区分し分析を試みた。

３．研究の方法

本研究では、19 世紀末以降のロシアのマスメディアにおいて、ロシア音楽の「ロシア性」という概念がどのように意味づけされ、追求されていったのか、またその問題が国民音楽の代表ジャンルであるロシア・オペラ、ひいてはそれを上演するロシアの歌劇場の活動といかに関連付けられていたのかを調査した。

具体的にはまず、『ロシア音楽新聞』など主要な音楽メディアで掲載された、様々な地域における各歌劇場の上演データを収集、整理し、レパートリー傾向を分析した。

次に、主としてロシア・オペラの本質に関する論考や批評を取りあげ、ロシアのマスメディアでいかにこの問題が西欧のオペラと関連づけられ、またその過程で自立した「ロシア音楽」像が描かれていったのかに注目し、ロシア音楽に託された象徴的機能を解読した。

４．研究成果

研究成果としては、以下の点が明らかになった。まず、①ロシア国内外の各歌劇場における上演データについて、19 世紀末から 20 世紀初期に革新的なオペラ上演を行い、ロシア・オペラ界の大きな転換点ともなった私立マーモントフ歌劇場を中心に、上演傾向を分析した。分析の方法としては、バフルーシン国立演劇博物館の所蔵する一次資料（記録文書、ポスター、プログラム）を参考に、初演数、上演総数、スパンなどいくつかの項目に分けて集計を行い、これをデータ化した。その結果、従来の私立マーモントフ歌劇場研究では、同劇場が「ロシア 5 人組」のオペラを取り上げていたことが専ら強調されてきたが、その実《カルメン》などのフランス・オペラで収益の安定化を図りながら「ロシア 5 人組」のオペラ上演を試みており、一概に民族主義的傾向にあったとは言えないことが明らかとなった。

また、同劇場の創設者であるマーモントフが古儀式派であり、古儀式派をテーマとしたムソルグスキーの《ホヴァンシチナ》のオペラ上演に強い拘りがあったものの、この目的を達成するまでに、同時代の西欧の芸術潮流から多大な影響を受けていたことが明らかとなった。

古儀式派は確かに、当時のモスクワにおける主要な芸術メセナの約 40%を占め、トレチャコフが中世のロシア正教のイコンを美術品として公開展示したように、ロシアの原点に回帰しようとする志向において、ロシア・ルネサンスの一翼を担っていた。マーモントフもこの例に洩れず、ロシア民衆芸術復興運動をアブラームツェヴォで起こした後に私立歌劇場を創設し、それまで帝室劇場が擁護してきた西欧重視のオペラとは異なる、「古

いロシア」を題材としたオペラを取りあげることに意義を見出していた。それは例えば、統計分析の結果として、マリインスキー劇場が 19 世紀を時代設定とするオペラ作品を、私立マーモントフ歌劇場が 16 世紀以前のロシアを舞台とするオペラ作品を数多く上演していたことにも表れている。

しかし、このロシア・オペラ上演に至るまでには西欧のオペラ文化との接触が重要な通過点であり、その例が、当時ドイツより公演に訪露していたマイニンゲン一座や、マリインスキー劇場のオペラ歌手として活躍していたパーレチェクからの影響であった。彼らからマーモントフは、オペラが音楽、演劇、美術といった多面的要素から成る総合芸術であることを再認識させられ、それまで音楽を第一優先とするあまり、蔑にされてきた演劇的側面、特に合唱隊による集団劇にこそリアリティを持たせる必要があり、そのためには「演出」が重要な役割を果たすことを学んだ。こうして、マーモントフは演出の実践に取り組み、その結果、大規模な合唱隊を要し、壮大な集団劇を重要な構成要素とするリムスキー＝コルサコフやムソルグスキーのオペラの上演成功につながった。また、この演出実践は当時のロシア・オペラ界に大きなインパクトを与えたのみならず、マーモントフと同じ古儀式派であり、アブラームツェヴォ時代からマーモントフ・サークル及び私立マーモントフ歌劇場に出入りしていたコンスタンチン・スタニスラフスキーにも影響を与え、彼の考案したスタニスラフスキー・システムとなって結実する。その後、このスタニスラフスキー・システムは演劇界からオペラ界に逆輸入されることとなり、私立マーモントフ歌劇場を引き継いだ私立ジミーン歌劇場のオレーニン（かつての私立マーモントフ歌劇場のバリトン歌手）のもとで、オペラ実践のために理論化されるのである。このような過程を経て、ロシア・オペラ界において資金、労力、人材の面で上演の困難なリムスキー＝コルサコフやムソルグスキーのオペラが定着した。私立マーモンフ歌劇場は、ロシア・オペラ史上において突発的に、しかも単独で歌劇文化の転換となる改革を行ったのではなく、前後の時代あるいは同時代におけるロシア内外の演出家、歌劇場、劇場の動向と、人・モノの移動を介して相関関係にあったうえでその改革を成立させた、ということが導き出された。この点から、古儀式派による私立オペラの上演傾向は、西欧からの芸術潮流に影響され、最新の表現方法を導入したうえで、表現対象となる題材をロシアである自らの原点に立ち返って探していた、ということが考えられる。

②ロシア国内外の歌劇場の相互比較に関しては、私立マーモントフ歌劇場が創設後間もなくからロシアの様々な地方都市で公演を行っており（例えば 1887 年にハリコフ、1896 年にニージニー・ノヴゴロド、1902 年にイルクーツクで公演を行うなど）、その影響として、私立マーモントフ歌劇場とカザン、イルクーツク、キエフ、ハリコフの劇場の上演傾向に連動性が認められることが明らかとなった。例えばリムスキー＝コルサコフの《サトコ》については、私立マーモントフ歌劇場における初演後、帝室歌劇場ではなく、ハリコフ（1898）、カザン（1899）、サラトフ（1899）、ノヴゴロド（1900）、キエフ（1900）、ロストフ・ナ＝ダヌー（1901）といったロシアの地方都市、ロシア外の地域の歌劇場がいち早く上演している。カザンはマーモントフが学生時代を過ごした地であり、また私立マーモントフ歌劇場のバス歌手として名を馳せたシャリアピンの故郷でもあり、私立マーモントフ歌劇場にとっては所縁がある都市である。ハリコフに関しても、私立マーモントフ歌劇場が 1887 年にハリコフ公演を行っており、逆にハリコフのツェレテッリ劇場が 1899 年、1900 年にモスクワ公演を行った際には、1897 年以降に私立マーモントフ歌劇場やモスクワ芸術座が使用していたエルミタージュ劇場で上演している。さらには、シャリアピンが 1901 年にキエフのボロダイ市立劇場に招待され公演を行っていること、ボロダイがその演出家としてのキャリアをハリコフで築いていたこと、ボロダイ市立劇場でカザン・サラトフ歌劇場が 1890 年代より頻繁に公演を行っていることなどから、興行主、演奏家、歌手の移動により、私立マーモントフ歌劇場を中心として、地方都市間でオペラ上演のうえでの緊密なネットワークが構築されていたことが指摘できる。

③ロシア・オペラの展望に関するロシアのマスメディアの美学的議論に関しては、1890 年代の『ロシア音楽新聞』を中心にテクストの読解を進めた。その中で明らかとなったのは、上記のような私立マーモントフ歌劇場のオペラ上演に際しての改革、リムスキー＝コルサコフやムソルグスキーのオペラ作品への取り組みが、マスメディアにおいては「『ロシア 5 人組』のオペラ上演に重きを置く民族主義的傾向にある」と一括りに評価され、私立マーモントフ歌劇場＝ロシア・オペラの代弁者としてのイメージが普及していったことであった。マーモントフの真意としては、帝室劇場から疎んじられていたリムスキー＝コルサコフとムソルグスキーのオペラに焦点を当てることが重要であり、特に彼にとっては古儀式派を描いたムソルグスキーの《ホヴァンシチナ》の上演が大きな意味を成していたのであって、一概に民族主義的志向にあったとは言えない。しかしこれに対して、当時のロシアのマスメディアは、ロシア文化界全体で高まっていくロシア・ナショナリズムの気運の中で、同歌劇場に「西欧に対抗するロシア」としての表象を見出し、それに基づく言説を展開した。このことは、同時期のロシア音楽界のマスメディアが、モスクワ、サンクトペテルブルグといった主要都市の

みならず、ロシアの各地方都市、またウクライナ、中央アジア、コーカサスなどの周辺地域の音楽文化状況にも目を向け、盛んに報じるようになり、西欧のオペラ文化とは異なる「ロシアの原点」を模索していたことにも表れている。

最後に、メディアそのものがオペラに創作面で直接的な影響を与えた事例として、グリゴリー・サムイロヴィチ・フリード（1915-2012）によるモノ・オペラ《アンネの日記》（1969）に注目した。ソ連の音楽史上においてモノ・オペラというジャンルが誕生したのは、1960 年代後半のブレジネフ政権期である。当時のソ連の音楽界においては、「新しい」音楽の容認が徐々に起こり、既存のオペラ文化を再構築するという内的ペレストロイカが生じていた。すなわち、政治的・社会的情勢の影響により文化界に美学的変化が起こり、オペラというジャンルのうちにおいて新しい概念や価値観、原則、規範、イメージが導入され、内部構造に変化がもたらされた。その結果、ソ連では、オペラの他に、オペラ・オラトリオ、オペラ・バレエなど、それ自体として他のジャンルと組み合わさった多様なオペラの形態が誕生し、モノ・オペラはこれらの中でも、既存のオペラ文化に対するペレストロイカという点では最もラディカルな位置にあった。その特徴として、それまでのオペラ作品においては取り上げられてこなかった囚人の手記や戦争で犠牲になった軍人の家族にあてた手紙を対象に描いている点が挙げられる。この背景には、当時のテレビ文化、つまりマスメディアの発展が大きく関与していた。具体的には、1959 年－70 年代のソ連のテレビ界において、モスフィルムという映画会社によって子供や青年を対象としたテレビ映画が製作されたのだが、テレビ映画という、映画館や劇場の舞台上とは異なる時間枠において、次のような特有の美学が創り出されたのである。すなわち、映画館や劇場で想定されるより遥かに長い時間枠が与えられるなかで、起承転結に基づくドラマチックな展開よりも、ある特定の事柄や人物に関し、実際の記録をもとにその深層内部まで掘り下げていくドキュメンタリー映画が創作されていくようになった。その結果、ドキュメンタリー映画の中で話を展開していく上で重要な役割を担ったのが、モノローグ及びコミュニケーションという様式であった。フリードの《アンネの日記》はこのように、フルシチョフ政権からブレジネフ政権への転換、及びそれに伴う当時ソ連の芸術界での漸次的変革の中で生まれた、モノ・オペラの一作品であり、当時のモノ・オペラの一連の作品群においては、ユーリイ・マルコヴィチ・ブツコー（1938-2015）の《狂人日記》に次ぐ第二作目に該当する為、先駆者的位置にある。同作品には、モノグラフ、回想録、自伝など実際の事柄を記録した文書を題材とし、ドキュメンタリー性を帯びるモノ・オペラの特徴が最大限に生かされている。それこそが、同作品において、複数の登場人物が具体的アクションの掛け合いによりドラマチックな展開を成していくのではなく、ただアンネという一人の登場人物が、モノローグの中で自分の記憶に埋め込まれた他者との交流を通じ、過去を振り返りつつ、現在を解釈しようとする点なのである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1　件）

①神竹　喜重子、「グリゴリー・フリードの《アンネの日記》（1969）――「交流」としての芸術」、『プロジェクト研究』、第 13 号、39-52 頁、2018。（査読有）

〔学会発表〕（計　14　件）
査読有

①Kieko KAMITAKE, The Patronage of arts in Russia from the End of the 19th Century to the Early 20th Century-----Old Believers and Private Opera Theaters, The British Association for Slavonic and East European Studies 2018 Annual Conference, Cambridge University, (Cambridge, England), 15 April, 2018.

②神竹 喜重子、「古儀式派商人による音楽メセナとロシア音楽の『自己覚醒』――私立マーモントフ歌劇場を中心に」、2017 年度早稲田大学オペラ／音楽劇研究所 11 月研究例会（第 166 回オペラ研究会）、早稲田大学、（新宿区、東京）、2017 年 11 月 11 日。

③神竹　喜重子、「19 世紀末から 20 世紀初期のロシアにおける芸術メセナ――古儀式派の資本家と私立歌劇場」、第 68 回日本音楽学会全国大会、京都教育大学、（京都市、京都）、2017 年 10 月 28 日。

④神竹　喜重子、「19 世紀末から 20 世紀初期のロシアにおける芸術メセナ――古儀式派の資本家と私立歌劇場」、第 67 回日本ロシア文学会全国大会、上智大学、（千代田区、東京）、2017 年 10 月 14 日。

⑤ Kieko KAMITAKE, Grigory Frid's "The Diary of Anna Frank": Recollection and Philosophical Thoughts on the Meaning of Life, The 3rd International Workshop in Slavic and Eurasian Studies, Szeged University, (Szeged, Hungary), 11 September, 2017.

⑥ **神竹　喜重子、「19 世紀末から 20 世紀初期におけるロシア古儀式派商人の芸術メセナについて」、2017 年度日本ロシア文学会北海道支部研究会、北海道大学、（札幌市、北海道）、2017 年 7 月 8 日。**

⑦ Kieko KAMITAKE, Grigory Frid's 'The Diary of Anne Frank': The Rise of Mono Opera as a Genre and Frid's Moscow Youth Musical Club, Annual Conference of the Soviet History Society 2017 "The Soviet Youth Music and Abroad: Interactions and Impacts in the Late Soviet Period", Senshu University, (Kawasaki, Kanagawa), 1 July, 2017.

⑧ Kieko KAMITAKE, Grigory Frid's The Diary of Anne Frank between Germany and Russia, The 8th East Asian Conference, Chung-Ang University, (Seoul, Korea), 3 June, 2017.

⑨ **神竹　喜重子、「グリゴリー・ブリードのモノ・オペラ《アンネの日記》」、北海道スラブ研究会、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、（札幌市、北海道）、2017 年 5 月 31 日。**

⑩ Kieko KAMITAKE, Grigory Frid's The Diary of Anne Frank between Germany and Russia, IMS 2017, Tokyo University of the Arts, (Taito, Tokyo), 22 March, 2017.

⑪ Киэко Камитакэ, Влияние С. Прокофьева на музыку в Японии, SRC / IREEES Joint Symposium "Otherness in Russian and Eurasian Contexts", Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University, (Sapporo, Hokkaido), 30 January, 2017 г.

⑫ Киэко Камитакэ, Влияние С. Прокофьева на музыку в Японии, Международный симпозиум «Прокофьев. XXI век», V Санкт-Петербургский международный культурный форум, (Санкт-Петербург, Россия), 3 декбря, 2016 г.

⑬ **神竹 喜重子、「モノ・オペラ《アンネの日記》――ナチス時代の少女を描く『現代音楽』」、第 66 回日本ロシア文学会全国大会、北海道大学、（札幌市、北海道）、2016 年 10 月 22 日。**

⑭ **神竹　喜重子、「モノ・オペラ《アンネの日記》――ナチス時代の少女を描く『現代音楽』」、2016 年度日本ロシア文学会北海道支部研究会、北海道大学、（札幌市、北海道）、2016 年 7 月 2 日。**

６．研究組織

（１）　研究代表者

神竹喜重子（KAMITAKE, Kieko）
北海道大学・スラブ・ユーラシア研究センター・非常勤研究員
研究者番号：70786087